乳幼児の人格形成（四）

中沢たえ子

四、自我と躾

犬や猫の子でさえ人間に飼育されて生きて行くためには躾けられなければならない。まして人間の子どもにとって、親や社会が期待するような人間に成長するためには躾は不可欠である。……と簡単に、また一般的にわれわれは言っている。さらに躾の時期について、身体で覚えさせるためには早ければ早い方が良いし、時には体罰も必要である、という意見がある一方、自分で理解してやる気にならなければ本当の躾とは言われない、そのためにはあまり時期が早すぎても無駄であるし、ましてや体罰は子どもの側に反抗心を育てるばかりで無意味だ……と真向うから相反する説も出る。

こんな具合に躾についての考えは個人的、時代的背景によっても随分異なっているけれど、さらには土地、国の習慣、風俗の相違によっても、全く驚くほどに異なった考え方もあるようだ。

最初から話がやや脇道にそれて恐縮であるが、その一例を御紹介しよう。

わたくしが昭和三十年初期、米国ボストン市のある児童相談所で勉強していた頃の出来事。ある五歳の男の子が主に情緒不安定の問題で相談所で遊戯治療を受けていた。その頃彼は自宅の裏庭で遊んでいる最中、必要に迫られればそのまま裏庭でおしっこをし、母親も、そのくらいの自由は与えてもよい、と考えて許して来ていた。ところがそれを見て隣家の主婦たちは、屋外で排尿するなんてとんでもない、多分あの子は問題児に違いないから児童相談所で精神科医に診てもらうべきである……と、母親にそれをすすめたのである。

来所の理由は〝屋外で排尿をする〟ということではなかった

が、注意を受ける以前に彼は問題児として児童相談所へつれられて来ていたわけであるが……。昭和三十年頃、まだわが国では路上の立ち小便は日常茶飯事であったし、乳幼児の排尿の躾を屋外ですることはよく見受けられたことであった。それで、当時この話を聴いたわたくしは、「それなら、日本人の大半が問題児になってしまう!!」と瞬間心中で独白したものである。しかしよく落ちついて考えればそうではなくて、風俗、習慣の相違が事の正否の判断、あるいは評価を変えているのであって、米国では屋外での排尿は日本人には想像できないほどに、とんでもない無作法と考えられていたのである。そこで本当の問題は裏庭で平気で排尿する幼児よりも、自分が属している社会の習慣、道徳を無視した躾を子どもにしている母親の心理にあるというわけではなかろうか。

ここで話を本論にもどし、では躾はいかにあるべきかをもう一度問いかけてみても、さきにのべた説にはそれぞれ一長一短があり、結局は各人、各様、各国の習慣、道徳に準じてしまうわけで、このような観点から見る限り、絶対的に良いという解答は出ては来ない。

ところで、子どもが育つ過程で親からの躾はぜひ必要ではあるが反面、躾のやり方によっては、子どもの人格形成を傷つけてしまっている例も少なくはない。極く簡単な例を挙げれば、たえず指示されたり、注意されたりしている幼児、すなわち口喧しい母親に育てられている幼児は、必ずと言って良いくらい落着きがなくて、それでいて必要なことをさっさとやることができないで他人まかせである。このような母子の因果関係は小児科の診察室で容易に観察することができる。そして、それが運悪く小学校入学以後まで続いてしまうと、母親から「何でもやることがスローなんです。注意しなければなかなかやろうとしないんです。どうしたらもう少し積極的な子どもにすることができるのでしょうか……」という相談を受ける結果が生じてしまう。それまでわたくしが何度となく、子どもが自分からやり出すまで親は黙って待つように……と助言して来た筈なのに……。性急な……というよりは、子どもから片時も目を離すことができず、自分の衝動をコントロールできない母親にとっては、黙って待つということは心理的拷問にも近いもののようで、わたしくの助言は結局は効を奏しては来なかったわけである。

ごく簡単な例（これを訴えている母親にとっては簡単なことではないのだが……）をみてもわかるように、躾とは単にこうあるべきであるという習慣、道徳の因子だけではなくて、実際にそれ

をする親（とくに母親）の心理がかなり重大な因子として子どもに働きかけているということに気づく次第である。

そこで躾の問題は、子どもの性格形成にさまざまな影響を与えるために、これを母子の精神衛生的、力動的人関関係という観点、及び子どもの人格発達、とくに、自我発達との関係を基礎として考えることが非常に重要なのではなかろうか。

さてこれまで漠然と躾という言葉で一括して来たが、ここで子どもが成長する過程で与えなければならない躾について具体的にとりあげ、その躾の最中に、躾する側と、躾される側との間の（大低は母と子の間の）、心理的葛藤について考えてみよう。

哺乳・離乳・食事の躾

生きて行くためには食べるということは絶対に必要である。幸い新生児には吸啜反射（きゅうてつ）といって口唇に触れたものに吸いつく神経的反射があり、乳首さえ与えれば吸いつき、満腹になれば自然に離して眠ってしまう。こう書けば、哺乳とはいとも簡単な作業のように思えるのだが事実はそうは行かず、さまざまな因子が妨害的動きをする。

T子は現在既に四歳を過ぎているが、わたくしは小児科医として彼女が生後三か月の時から現在も続けて何かと診て来ている。生後三か月の時最初に彼女を診察した理由は、ミルク拒否であった。哺乳瓶でミルクを与えると十ccものまないうちにゲッと吐きそうになり、泣き出して乳首を離してしまう。一日の哺乳量は二百cc乃至三百ccで、それも眠っているすきにこっそりと口の中に乳首を入れて吸わせて、やっと飲ませている。約一か月前からこういう状態で母親は不安のあまりに睡眠障害を亢じ、母子共に出生時の産院に約二週間入院した。検査の結果子どもの食道、胃には異常はなく、むしろ育児ノイローゼだと言われて退院した。母親の様子をみると、正にノイローゼの様で一日中赤ん坊がミルクをのまないことが不安で、ミルクの入った哺乳瓶をにぎりしめて、赤ん坊の顔をのぞき込んでいる有様である。赤ん坊の方はH.P乳量が少なく空腹のためか、睡眠時間は少なく、大きな目をパッチリとあいて二本の指を口の中に入れて激しく指しゃぶりをする。それでいて乳首を口に入れると嘔吐反応を起こすのである。母親は不安と疲労のあまりに、母子心中したいと口走り、父親も心配で勤めに出られない有様である。わたくしは約一週間母親の不安を鎮めるよう試みたが母子共に好転しないため、赤ん坊のみを入院させ、その間約三か月母親の心理治療を行なった。赤

ん坊の哺乳拒否は正に心理的なものであったようで、入院後次第に哺乳力を増し、体重も増して退院した。しかしその後も、T子の少食、食べものに関心が無い癖（母親の言葉によれば）は最近まで続き、食事に関する母子の葛藤は延々として続いている。母親に似て細長型のT子は元来小食なのであろうけれど、母親にとってはそれがどうしても納得できず、無理矢理に口の中に食事をつっ込むのである。従って三歳になってもT子は自分でスプーンを持って食事をしようとはしない。食物を手で触れようともせず、母親に食べさせてもらわなければならない。三歳といえば、自分で食事をし、食べたい物や量を自分で決めることができる年齢である。つまり食事に関する独立であり、その分野の自我の確立である。

T子は三歳過ぎた頃からアパートの下で同年配の子どもと遊ぶ楽しさを覚え、同時期に妹が出生し、この頃より「少しくらい食べなくても死にはしない……」という考えが母親の心に出現しはじめ、次第に母親が食事の点で意識を集中しなくなってから、自分で食べはじめるようになった。現在は一応家庭での食事に関するぐちを母親はほとんどこぼさなくなったが、幼稚園でお弁当が始まる時期に登園拒否をしたり、また集団適応にもやや問題があり、ボス的に振舞っていられる限りは元気なのだが、一度いじめられるとこわがってすぐ登園拒否をはじめる。いわゆる自信がない性格である。哺乳に始まった母子の葛藤が、何時の間にか食事の躾の失敗に発展し、その結果弱い性格、すなわち自我の弱さ、現実適応力の弱さを形成しつつあることを感じさせるケースである。

排尿・便の躾

子どもが成長する過程で、母と子が一度は必ず通過しなければならない〝おむつをとること〟である。子どもを育てた母親ならば必ずこの時期に少なからず不安を感じたと述べる筈であり、決してこれは容易な躾ではない。書物によく書かれているように、子どもは一歳半から二歳位にならなければ尿意を脳で知ることができない。したがってその年齢以前におむつをとって便器でさせようとしても、しょせん偶然かあるいは条件反射にすぎず、子どもの自発的意志による排尿便の自立という意味にはならない。

E子は現在二歳八か月、まだ排尿便を便器では絶対にせず、パンツの中でしてしまうので母親の不安や焦燥感は頂点に達している。毎日叱って叩いたり、便器に長時間座らせても効を奏せず、

結局はパンツの中にしてしまう、汚すと叱られるので最近は便秘がひどくなり、三、四日出なくなってしまうという。母娘共に暗い表情で、とくに母親はアパートの他の子どもたちはもっと小さい年齢でもおむつがとれているのに、うちの子だけがとれない、恥ずかしくて外へ遊びにも行かれない、と怒り顔で訴える。

最近、若い夫婦はアパート住まいが多く、同じアパートで同年齢の子どもをかかえた母親が親しくなると、話題はどうしても子どものことになる。うちの子は離乳食をどれだけ食べる、体重がどれだけある、何か月で歩いた、そして何か月でおむつがとれた。すべてが話題であると同時に母親間の無言の競走となり、母親たちはわが子の成長を少しでも他よりも早かれ……と焦るのである（競馬ではあるまいし……）。

E子はその犠牲となったわけである。母親は一歳頃から排尿便の躾を始め、最初の頃は一時間毎につれて行けば、おむつを使う必要はなく、それをアパートの外の立ち話で、得々と他の母親に話していたという。ところが一歳八か月頃から、便器ですることを嫌がり、母親がパンツをはせるとすぐ其処へしてしまうようになった。この時、叱らなければよかったのだけれど……と母親は後になって述懐するのだが、かなり厳しく叱り続け、母子間の葛藤が発生してしまった。以後、問題は悪循環を続け、E子は母親から片時も離れられないという分離不安の状態になってしまっていた。

これ程に問題をこじれさせてしまった背景には、結婚してはじめて田舎から東京に移り、狭いアパートに住んで昼間の話し相手は同じアパートの同じような境遇の母親たちだけ、元来勝気で妥協のできない性格の母親が、極く僅かな子どもの反抗に強い挫折感として傷つき、排尿便、さらにはその他全般にわたっての子どもの独立、成長を認める心を失ってしまったと説明できるわけである。

食事、排尿便、その他基本的な身辺自立についての躾は、子どもの身体（運動的・知覚的）の成長の適切な時期に、親が子どもの自我の成長を認め育てていく気持ちになれば、容易に、また順調にできる筈のものである。厳しく、とかやさしく……とか言う言葉は何もその際必要ではない筈である。

清潔の躾

四歳になったばかりのS男が、頑固な便秘で苦しがっているということで小児科外来を訪れた。聴いてみると約五か月前、新築

の家に引越して来、それまで毎日四、五人の友だちと外で元気に遊んでいたのに、此処では友だちも無いし、冬の季節で外遊びもできない。一か月位してから次第に便秘が始まり、最近は数日毎に灌腸をしなければ自分では出なくなってしまった。三、四日排便が無いとお腹が張って苦しくなり、元気もなくなってため息ばかりつくようになる。あまりひどいので土地の総合病院の小児科を訪れ、レントゲン検査を受けたが特に腸に異常は無い。医者は彼を診察台に寝かせ、薄いゴム手袋をはめた指で肛門から糞をかき出して、母親にも家でそうすることをすすめた。もちろんその間、彼は泣きわめいていた。

その話を母親から聴く間、わたくしは彼の表情をじっと観察してみた。いかにも悲しそうな表情で、子どもの顔とも思えない。さらに腹部を診ようとしてベッドに寝かせると、ベソをかき始める。病院でやられた恐怖感のためである。母親はこのままでは暗く、小心で、こわがりの性格になってしまうと心配をする。絵は鉛筆だけで本当に小さくしか書かないし、手が汚れるのをとても気にするとも言う。母親を見るといかにも清潔好きそうな感じの人で、小学校六年生のお姉ちゃんは母親以上に弟に対して何かと口やかましいという。

翌日、わたくしはS男だけをプレイルームに招き、意図して絵の具、筆、水、大きな紙、エプロンを用意した。彼はすぐ絵の具に関心を示し、彼の鉛筆画からは想像もできないようなたくましい電車を画面一杯に書いた。その間もちろん、再三絵の具が手につくのを気にしていたが、わたくしは繰り返し安心を与えた。四枚目頃から、それまで絵の具だけを筆につけて水を使うことを拒否していたのが、水をたっぷりとまぜ、筆ではなく、指で、さらには掌で絵の具をぬりつぶし始めた。フィンガー・ペインティングである。

この時間の後、絵の具で手を染めている子どもを見て、母親はつぎのようなことを語った。母親自身も、子どもの便秘は心理的なものではなかろうか？　と感じていた。引越して来て新しい家のため誰れもが、彼がきたない手で壁などに触れることを気にして注意した。母親は、以前は洋便器であったのが、和風便器となり、なれない便器を彼が汚すのが嫌で、繰り返し注意し、さらには便器のまわりにマットレスを敷いてしまった。家の中でこんなストレスが発生したのに加えて、外で友だちと遊べなくなった彼は、大きな姉の真似ばかりをするようになった。鉛筆で小さな絵ばかり書いて、母親がクレヨンを与えても使わなくなってしまった。その間に何時の間にか頑固な便秘が形成されていたのである。

このケースは、母親に便器のまわりのマットレスを取り除き、家の中や外で、母も姉も共に絵の具、水、砂で遊ぶこと、壁に触れることを注意しないこと、さらに子どもの食べたいものを充分食べさせて、朝母親も共にトイレできばってみること、以上を指導した結果三日目から、難治と思われた便秘がうそのようになおってしまったのである。既に性格形成上にも問題を呈し始めていたところなので、治癒したことは幸いであった。

このような極端な例は稀であるが、汚していたずらをしたい盛りの年齢（二歳から五歳頃まで）に、清潔の躾を厳しくし過ぎると必ず何かの問題が発生する。チック症、子どもらしさが無くなる、集団遊びができない、等々……。清潔が良いことを教える必要はあるが、子どもが自分の自我の力で汚したい衝動をコントロールできるようになるように、大人はゆっくりと待ちたいものである。

＊　＊　＊

幼児期の躾には、この外に礼儀・作法の躾、その他いくつかのことが考えられる。幼児期に与えられる躾が前に述べたように、子どもの自我発達に沿った無理ないものであった場合、親から与えられた躾が学童期になると子どもの精神内界で、精神分析学的には、上位自我と呼ばれる精神機能となって、子ども人格の一部となり、社会的にも道徳的にも信頼ができる人間として成長することができる。上位自我は個人の精神内界で、イド、自我と共に仲良く機能をはたすべきものである。ところが、これまでに自我の分離・独立の項から続いて述べて来たように、発達のある時期に何らかの親子関係の問題のために、また躾上の失敗のために、自我の健康な発達に支障をきたした場合、上位自我の健康な形成にも問題が発生する。「言われなければ自分でなかなかやろうとしない」と母親に何時もお尻をたたかれる小、中学生から始まり、時には非行にまで及ぶ上位自我の障害が、幼少時代の自我形成と躾のあり方に帰因することを痛感する次第である。＝終り＝

（中沢小児クリニック）